高尾山報 令和3年6月号 毎月1回発行 通巻第689号

高尾山報

令和3年6月号

薫風に 高尾三十六童子

法の水茎

大正大学講師　髙橋秀城

(108)

今年は例年よりも早く、雨の時節を迎えました。私が住まうお寺にも睡蓮やバラ、紫陽花や花菖蒲など、雨の似合う草花が庭を彩っています。まるで梅雨の時期を楽しんでいるかのようです。

五月雨に
物思ひをれば
郭公
夜深く鳴きて
いづち行くらむ

（『古今集』紀友則）

（五月雨を聞きながら物思いに耽っていると、時鳥が夜更けに鳴いた。雨の中を、どこに飛んで行くのだろう）

雨音の中で耳を澄ませば、元気な鳥たちの声も響き渡っています。田植えを終えた山里に時鳥が鳴き、それに負けじと鶯も囀っています。季節の変わり目に、春と夏との歌声の競演です。

この「五月雨に」の歌では、雨夜に鳴いた時鳥の声にハッと胸をつかれています。時鳥もまた短夜に心乱れていたのでしょうか。

千峰の鳥路は
梅雨を含めり
五月の蝉声は
麦秋を送る

（『千載佳句』李嘉祐）

（多くの峰を結ぶ鳥の通い路には、梅雨の雨を含んだ雲が垂れ込め、旧暦五月に鳴き出した蝉の声は、麦秋の初夏が過ぎ去ったことを教えてくれる）

「麦秋」は、麦の実り熟する時季を表すとともに、旧暦四月の異称でもあります。やがて蝉の初鳴きが聞こえてくれば、梅雨明けも間近でしょう。鳥たちは悠々と梅雨空を羽ばたきながら、「走り梅雨」（梅雨入り前）から「送り梅雨」（梅雨明け前）までの季節の変化を、上空から見届けているのかもしれません。

日本には春夏秋冬の四季はもちろん、梅雨などの季節の重なりが見られますが、遠くインドに目を移せば、大きく暑季・雨季・乾季の三つの季節に区分されるそうです。それは「三際時」（三時）とも呼ばれ、熱際時（正月十六日から五月十五日）・雨際時（五月十六日から九月十五日）・寒際時（九月十六日から正月十五日）に分けられます。

三時を踏まえた「三時殿」という言葉があります。それは三つの季節（熱時・雨時・寒時）を快適に過ごせる三種類の建物を意味し、遙か昔、お釈迦さまの父浄飯王が、悉達太子（出家前のお釈迦さま）のために造ったと伝わっています（『仏本行集経』）。至れり尽くせりの親心ですが、お釈迦さまはその宮殿に安住することなく出家（家を出て仏道修行すること）の道を歩まれました。

『今昔物語集』には、三時殿から外に出た、お釈迦様のいとこの出家話も語られています。

今は昔。お釈迦さまのいとこに阿那律という者がいました。母親は阿那律を愛し、何不自由のない三時殿を造って阿那律に与え、多くの侍女たちと楽しい生活を送らせていました。

そんなある日、阿那律は母親に「出家をしたい」と願い出ます。しかし母親は、子供かわいさに許しません。そこで、阿那律はいとこの跋提を誘って繰り返し願い求めました。最後はとうとう息子の熱意に押されて出家を受け入れました。

いよいよ出家当日。釈迦族の八人と、そこに理髪師として仕えていた優婆離という者が、象や馬に乗って都を出発しました。国境を越えたとき、美しい衣服を脱いで優婆離に手渡し、「今後は、これらの宝物で生計を立てなさい」と言って別れます。

優波離は一人考えました。そして「私も出家したい」と決意すると再び後を追いかけ、皆で仏のもとに辿り着きました。すると、お釈迦様は言いました。「八人の者には驕慢の心がある。だが優婆離だけには、それがないのだ」と。優婆離は、誰よりも先に戒を受け、上座（長老）になったと伝えています。

（『今昔物語集』巻一）

阿那律は、豪華な三時殿を飛び出し、心の平安を求めて出家をしました。それは素晴らしい行いでしたが、どこかに驕慢（人を見くだす心）が残っていたことを、お釈迦様は見逃しませんでした。使用人として雇われながらも道心（仏を信じる心）を持ち、世財（この一生での富）よりも聖財（とこしえの教え）を選んだ優婆離の行動を評価したのです。

藁屋の雨と
仏法とは
出て聞け

（『譬喩尽』）

（藁屋に降る雨の音も仏さまの教えも、家の中では聞こえない。外に出て聞くのがよい）

梅雨の時期は、心も身体も引きこもりがちになってしまうものです。出家とまではいかなくても、外で自然を感じてみませんか。五月雨の音や香りでしっとりと心を潤しながら、夏の太陽のお顔を待ち望みたいと思います。

（栃木北部教区普済寺）

梅雨の時季を迎え紫陽花などの花が山中を彩る

折り折りの記 (142)

鶯や五輪の旗舞ふ高尾山

波多野　重雄

一陣の吹き上げる高尾山の風が、岩壁を這い上がる鶯の声を山上に運ぶ風景は、見事という外はない。

私は以前、山上で鳴く鶯の声をきょろきょろして見渡したが、姿を見出す事が出来なかった。ベテランの高尾登山者に聴いて初めて、山麓の鶯の鳴き声が崖を駆け上る光景を知った。従って、山の天辺に山麓の鶯の声を聴くのは、高尾山以外にはあるまい。

真白な富士山を仰ぎ「五輪の旗」を風になびかせて鶯の声を聞くのは、高尾山ならではの光景であろう。

（高尾山健康登山の会会長）

十八本山参籠

夏参籠総本山長谷寺

厚木市　荒井　一雄

早晨登迴廊
仰拝観世音
昔旦一茶想
同覚醒佛心

紅牡丹
極楽浄土の
夢の中

夏、総本山長谷寺に参籠る
早朝、回廊を登る…
仰ぎ拝す、
十一面観世音菩大薩様を…
昔日の朝、(小林)一茶の想ひ…
同に覚醒む、み仏のみ心に…

高尾山内八十八大師巡拝

五月十一日、高尾山内八十八大師巡りが行われ、総勢十八名の方々が参加されて高尾山中を巡拝し、お大師様との御縁を結ばれました。

巡拝は清滝周辺のお大師様から始まり先達の僧侶とともに、急峻な琵琶滝道を登る徒歩練行を行い、薬王院までの道中で各お大師様に法楽をあげました。

山上に到着し、大本堂にて御護摩修行に参加された後、大師堂周辺の八十八大師御砂踏み霊場を巡りました。精進料理の昼食後には、一号路を下って道中の各お大師様を巡拝して不動院に到着。その後は不動院にて巡拝の成満を御本尊様に奉告する献灯式が佐藤山主御導師のもと厳修されました。

各所の御大師様に法楽をあげる

先達の山伏と大師堂前にて

交通安全祈願碑法要厳修　五月一日

五月一日、高尾山麓の清滝駅前において、高尾交通安全協会により二年前の五月一日に建立されました、「交通安全祈願碑」の交通安全祈願法楽が、佐藤山主御導師のもと執り行われました。

祈願碑には先代の大山御山主が揮毫されました、**「一心祈願　人車一体　愛情運転」**という言葉が刻まれております。

高尾交通安全協会の小松政見会長他、多くの会員の方々が参列され、石碑の前で交通事故が無くなるよう、一心に祈願されました。

事故ゼロの願いを込め祈念された

いけばなの心⑯

華道教授　佐藤　宗明

六月に入り気温が上がると、私は初夏を感じ、水辺のさわやかな情景が目に浮かんできます。

草木も気候の変化を敏感に感じ取り、刻々と変化します。今回も前回と同じ『水物』を使った作品をご紹介します。

今回使用している植物、ご存知でしょうか？花屋では入手困難な花材、沢瀉というものです。沢瀉はクワイに似た水草で、田んぼや蓮池などにひっそりと生えています。ただその場合、雑草として整理されてしまうのでほとんど見かけることができません。また沼地などに生えた場合、他の雑草に埋もれて見つける事も大変です。しかも目に入っても普通なら見逃してしまうような、目立たない、小さい白い花しか咲きません。

いけばなではその静かな美しさを見逃さずに表現する事が目標の一つでもあります。うまくその美しさを見出だせた時、見る人の心に感動が生まれます。

今回は沢瀉を使って夏の暑い中、涼感を感じて頂ける様に生花正風体一種生を生けあげました。いかがだったでしょうか。爽やかな気分を味わって頂ければ幸いです。

花材：沢瀉（おもだか）

料理愛好家・平野レミさん　初夏の高尾山を訪れる

五月二十日、『きょうの料理』の出演等で有名な、料理愛好家の平野レミさん（写真右から三人目）御一行が、青葉色付く高尾山へ御来山されました。

御一行は御護摩修行に参列され、当山僧侶による境内案内の後、料理長による料理説明と共に精進料理を召し上がりました。

その後、佐藤御山主と面会され、「東京にこんな場所があったとは知らなかった。貴重な体験です」とお話され無事に山を下りられました。

佐藤御山主と記念撮影

高尾山年代記 18

歴代山主の事跡をたどる

明治大学博物館　外山　徹

十世堯秀2　寛永の再興（下）

寛永期の建築様式である奥之院不動堂

「寛永」の年号は上野の寛永寺や銭貨の寛永通宝でもよく知られる。三代将軍徳川家光の治世として、江戸幕府の確立期を象徴する年号である。寛永江戸図屏風にはそびえ立つ江戸城天守と繁華な街区が描かれ、新興の都市「江戸」を視覚的にも印象付けている。

寛永期の高尾山

その寛永の八年（一六三一）は九月二一日付の高尾山中通り抜けを禁ずる幕府の宿老が連署した覚書に、すでに参詣者を集める高尾山像が現れる。それに先立つ三月の日付で高尾山一〇世堯秀の筆による寺鐘の勧進牒が作成されていた。当時の高尾山の様子を知る希少な手がかりである（現文漢文）。

（前略）**そもそもこの山は東方の上、瑠璃医王の垂迹、愛宕・飯綱鎮護修むるなり。**

「瑠璃医王」すなわち薬師如来の垂迹（仏が現れること）である愛宕権現と飯縄権現の祭祀は「抑々（そもそも）」とあるのでそれ以前からのことだったのだろう。

仏神徳を同じくする故、詣でる者諸願満足せざること無し。（中略）

「仏神同徳」とは愛宕・飯縄を薬師如来と同体とする神仏習合の霊地であったことを示している。そのため参詣する人々は祈願に満足しないことはなかったという。

世の変化に遇い、厂塔わずかに存して鳧鐘はすなわちなし。沙弥常にこれを憂う（後略）

「遭世之変化」とは以前に述べた桃山時代末の全山焼亡を指していると思われる。「厂塔纔存」の「厂塔」とは「雁塔」のことだろう。中国の大雁塔が有名だが、寺院の建造物という意味がある。この頃には少ないながら堂宇が再建されており、未だ寺鐘の無いことを住持が憂慮し、その鋳造費用を募るという趣旨である。堯秀晋山の元和六年（一六二〇）からは足かけ一二年の歳月が流れていた。勧進牒にある「沙弥常憂之」という表現は、鐘のない状態がしばらく続いたというニュアンスを感じるが、鐘が不可欠なものと認識されていたならば、堂宇の再建時期は鐘の勧進からそれ程遠くさかのぼらないのではないかと考える。

伽藍の状況

さて、この「厂塔纔存」という状況だが、この六年後にあたる寛永一四年付の文書に「飯縄・薬師堂宮」「薬師堂の近所、いつなの宮の近所」という文言が見え、本尊である薬師如来を祀る堂と飯縄大権現を祀る社がそれぞれ存在したことが確定できる。六年というタイムラグからすれば、勧進牒の「厂塔」はこれらに相当するとしてよいのではないか。

薬師堂は延宝五年（一六七七）十一月晦日の火

災で被害を受け、飯縄宮も享保年間（一七一六～一七三六）に建て替えられているので、寛永期の薬師堂・飯縄宮は現存していない。しかし、現在の奥之院不動堂が寛永期の様式であるので、幸いにも往時を偲ぶことができる。この不動堂の年代比定は、現在では一七世紀中と幅を持たせられているが、延宝の火災後、仁王門再建の貞享元年（一六八四）が確実な記録としてあるので、同時期の再興の可能性を考慮してかもしれない。江戸後期の絵図によると、仁王門の奥には、薬師堂を中心に右に現在の大師堂（元の大日堂）、左に奥之院不動堂（元の護摩堂）が並んでいる。建立年こそ不明だが、様式からして不動堂の建立は寛永年間かあるいはそれほど遅れるものではないと推定され、後世における堂の配置からも三棟並んだ状態に整備されたものと考えられる。大師堂は軒の垂木の形状が異なるが、大きさは不動堂と全く同じで、薬師堂を真ん中に左右対称が意図されたと推測される。

大本堂の前に安置された寛永古鐘

勧進牒が作成された三月から喜捨を募るとすれば、これは新興の都市江戸がその舞台となったことは想像に難くない。文面にも「帝郷」の文字が見える。そして、鐘の銘文に九月とあるので、その頃には費用の工面に目途が立っていたことになる。この勧進の過程で高尾山の名が広まり、宿老の連署にあるような参詣者に結び付いたのではないだろうか。

寛永古鐘

現在は「寛永古鐘」と呼ばれ、大本堂前に安置されている鐘の銘文からは再興に尽くした堯秀の感慨を偲ぶことができる。

武州高尾山有喜寺者
瑠璃光仏之垂跡也、
仄聞往昔鋳梵鐘以報
晨昏、不図遇世不平
為烏有矣、今以檀越
之衆力陶鎔小鐘、而
掛筍虚、蓋其志雖似
童子之聚沙、然継絶
興廃之義在此矣
銘二日
有喜霊刹　瑠璃道場
点離俚俗　安置医王
神徳攸感　人民瞻望
爰鋳法器　以守典章
華鯨吼月　黄鶴鳴霜
豊嶺秋暮　武陵夜長
覚無明睡　促旅客装
大檀致力　萬歳伝芳
寛永八年龍集
辛未秋九月　日
住持沙門法印堯秀

（現代語訳）

武州高尾山有喜寺は瑠璃光仏（薬師如来）の垂跡である。ほのかに聞く、昔は梵鐘を鋳て、それで晨昏（朝夕）を報じていた。図らずも世の不平に遇って、烏有（焼亡）による廃墟）となった。今、檀越の衆力をもって小鐘を鋳造した。そうして筍虚（鐘を吊る横木）に掛けた。その志は童子の聚沙に似たものとは言え、絶えるを継ぎ、廃れるを興こすの義ここに在り。

「童子の聚沙」は仏教の教説にあり、小さな功徳を積む意味だが、子供の砂遊びのごときと自らの事績を謙遜した表現。

銘に言うには。

有喜の霊刹（寺）、瑠璃の道場、俚俗を離れて、医王を安置す。神徳を感ずるところ、人民羨望す。ここに法器を鋳て、以って典章を守る。華鯨（梵鐘）月に吼え、黄鶴霜に鳴く。豊嶺秋暮て、武陵夜長し。無明の睡りを覚まし、旅客の装を促す。大檀力をいたし、萬歳芳を伝う。

「典章を守る」は仏法の教えを伝えること。「無明の睡りを覚まし」は仏法によって人が教え導かれる意味だが、鐘の音によって繁栄（黄鶴）が兆し、長い衰微の時期（秋暮・夜）がようやく明けたことを修辞的に表現している。桃山時代末の荒廃以来、ここにひとまずの再興が果たされたのであった。

おことわり　本連載では史料の引用について、読みやすく原文に手を加えています。

高尾山物語 38

開運の蛸杉

絵・橋本豊治

蛸杉の保護

樹齢四百五十年を超すため、人が直接触ると木に悪影響を及ぼすとのことで、近年保護のため柵が作られました。御参拝の方は、隣にある石像「開運ひっぱり蛸」の頭をなでるようにしましょう。

ケーブルカーの高尾山駅から薬王院へ向かう途中、「さる園・野草園」を過ぎると、蛸の足のような形をした杉の大木、樹齢四百五十年を越す「蛸杉」が見えてきます。

この杉の木にはある伝説が残されております。その昔、薬王院へ続く参道を通す時、工事を妨げる邪魔な杉の根を、明日の朝に伐るということになりました。

あくる日、杉を伐り倒そうとすると、杉の根は一晩のうちに根を蛸の足のように曲げ、道を開いていたということです。昔の人は、これを天狗様の神通力と言っておりました。

この逸話から蛸杉は道を開く、すなわち「開運」を意味するようになり、御神木として今も信仰を集めております。

蛸杉の高さは三十七メートル、目通り幹の周囲は約六メートルです。八王子市の天然記念物にも指定されています。

いろは天狗の落し文 5

綻ばしてはならぬものに　親子の関係は特に

親子関係とは、子供が初めて体験する人間関係で、その後の人間関係構築に大きな影響があるとされております。

そのため、親子関係を上手に構築することで、子供が学校での集団生活、社会に出てからの人間関係を円滑に行えるようになります。逆に、親子関係が上手くいっていないと、他人に対して信頼感を持つことができない傾向にあるとされます。

親子に限らず人間関係を良くするためには、コミュニケーションをとることが大切です。

おはなし散歩道

源作爺と仙太(2)

湯沢町　富樫あい子

ある山奥で木彫りをしている、源作爺とタヌキの仙太の話である。

爺はアユ釣りが大好きで、解禁の日に山を下った川の淵にある水神様に木彫りのアユを奉納し、豊漁と安全を願うのだ。

「爺！　行くべぇ」

タヌキの仙太が来た。

「おっ、元気だったか？」

「元気だ。節分以来だな」

爺が振り向いた。

「ほっ、こりゃ倅だ！」

亡き倅、そっくりに化けた仙太を見入った。

「爺が喜ぶ姿が嬉しいぜ。おれも老いぼれだ。若返るに時間がかかるぜ」

出かける時は、必ず倅の仙太郎に化けるので、爺は仙太と名付けた。

梅雨空の下、親子の様にアユの木彫りと釣り竿を担いで山を下って行くと茶屋があった。

仙太がボソッといった。

「朝飯食ってないんだ」

「こいつめ！　草餅か？」

茶店の縁台で爺は一服した。仙太が三個目の草餅を口に入れようとした時、トンビが素早く横合いから奪い去った。

おぉ～　手を伸ばして追ったが、トンビはピーヒョロロと仙太を尻目に舞い上がって行った。

「この野郎、許さん！」

仙太は地団駄を踏んだ。

「そう怒るな。お前が油断したんじゃ。この前、人の心を悟る様になったと言っていたがトンビの真理は悟れんか？」

爺は空を仰ぎ笑った。

「うーん悔しい！」

仙太は怒り、速足になったので水神様に早々に着いた。二人はおもむろに参拝した。そして川に入りアユ釣りを始めた。

「仙太、競争だぞ。夜は塩焼きで一杯やろう！」

「ガッテンだ！」

仙太は気を取り直して釣りに集中した。

「初物だ！」爺の声に、仙太は（先にやられた！）と少々腹立たしい。

そこへ空から『ピーピピピ』と先のトンビが警告音のように鳴いた。

「あの鳴き声は自分の縄張りに、敵が侵入してきた～という鳴き声だ」

爺の声が流れの音に混じって聞こえた。

「縄張り？　草餅返せ！」

石ころを投げつけた。

「仙太！　集中だ！」

トンビはピーピピピと鳴き続けている。

「うるさい！　オッと！」

怒鳴った勢いで川藻に足を取られドボーン！

尻餅をつきビチョビチョだ。タヌキに戻った仙太は恥ずかしさに慌てて逃げ去った。爺が叫んだ。

「おーい。仙太、待て～」

数日たっても仙太は来ない。爺は住み家を知らない（元気でいてくれ！）

爺は水神様に願掛けをと、毎日参拝に出かけた。

ある日、一心に祈っていると祠の方から声がした。

『数か月前タヌキがトンビの生んだ卵を盗み食した。そのむごさを恥じれ。

タヌキの傷の痛みは祠の脇の野草が効く。干して煎じて飲ませよ』

（ハァー有難いお言葉だ。仙太喜べ）爺は、野草を摘みながらつぶやいた。

「妻や子を人に撃ち殺されて仙太は命の尊さや悲しみを知っているはずだ。

わしも息子を病で亡くし家族の無い者同士で励まし合っていたのにトンビの卵を、馬鹿たれが！」

と爺が怒りを放ったとき、タヌキと目が合った。

「居たのか？」

「全部聞いた。俺が悪い。何回も爺の家に行ったが、入れなかった」

爺に詫びた。そして、空に向かい手を合わせた。

「悪かった二度としない」

トンビに詫びて誓った。

そこへ、トンビがきて羽を一枚落して行った。

「ほぉ、トンビがおとしまいをつけてくれた」

と爺は悟った。仙太も多いに反省したという。

（挿し絵・小出　茂）

観音菩薩の宗教 ㊷

国際教養大学特任教授　金岡秀郎

観音菩薩の転生者としての聖徳太子（その5）

歴史文献、ことに仏教文献や伝記には「加上」という記述の形態がある。歴史学でもっとも重視されるのは同時代資料で、通常これは一次資料と呼ばれる。それに対し後世の資料や他書への引用は二次資料、三次資料とされるが、そこにはオリジナルの記事に新たな見解や解釈、時には脚色や捏造が加わることがある。そうした後の時代に加えられた部分を「加上」とか「加上の説」と呼ぶ。一例を示そう。

四～五世紀の『後漢紀』や『後漢書』には、仏教が初めて漢に伝わったことを次のように記す。

「後漢の明帝が夢に項から日月の光を放つ金色の人を見た。陛下が群臣にその意味を尋ねると、家来は『西に仏と呼ばれる神がいますが、陛下の夢はそれでございましょう』と答えた。明帝は使いを天竺に派遣して、その道術（教え）を問い、仏の形像を描かせた」（原・漢文）。この短い一節が後世の資料では徐々に新たな内容を加上していき、後の『牟氏理惑論』では群臣の名前や、天竺に遣わされた使いの名前が出るようになる。さらに遣いにより『四十二章経』がもたらされ、洛陽に仏寺を建てたことが加えられる。六世紀中ごろの『魏書』「釈老志」にいたると、その寺は白馬寺と名付けられたと書き加えられた。

前号までに見たように、聖徳太子の伝記でも『古事記』『日本書紀』の記事を最初期の記録とすると、平安期の『聖徳太子傳暦』では、多くの加上がなされていった。それらの記事のいずれが史実でいずれが伝説かは常に議論の対象となっているが、『傳暦』の所伝が人々の共有する聖徳太子像を作り上げたことは明らかである。そこでは、しばしば思想史的事実の重要性が歴史的事実のそれを凌駕した。

ここに寛文六年（一六六六）に京都の書肆から出版されたとされる『聖徳太子傳』（以下『太子伝』）がある。『太子伝』は、仮名書きで絵入りの出版物として初めて公刊された太子の伝記で、一般社会にまで広まるという画期的なものであった（杉本好伸・編『聖徳太子伝』国書刊行会、二〇一一年）。従来の太子の伝記が真名書き（漢文）で、高い教養を有した僧侶などが読んだことに対し、本書は江戸期の庶民にも読まれたと推定される。それはこの時代、庶民への仏教の教化のために多く編まれた「勧化本」の中の一点に位置づけられることからも明らかである。

仮名書き、絵入りという形式的特色とともに、『太子伝』は『古事記』以来の太子像にさまざまな宗教的・伝説的な加上の説を有する思想的特色を有している。なかでも、太子の前世・現世・来世について述べる点が、飛鳥・平安以来の太子像への重要な加上である。それによれば、聖徳太子が観音菩薩の垂迹であり、前世に天竺（インド）から震旦（チーナスターナ＝シナ）における六人の人物に転生し、現世で用明天皇の皇子として生まれたとされる。さらに現世での活躍の後、薨去後の来世にも重要人物に転生し、日本仏教の興隆に貢献する。このことを太子自身の口で語ったとするのが『太子伝』の叙述である。

近代的な意味での伝記が、その人物の誕生から死までを扱うのに対し、合理主義的バイアスのかかっていない『太子伝』は、前世も来世も語る。それは、仏伝とカテゴライズされるブッダの伝記と同様である。仏伝の中でも『ジャータカ（jātaka）』は、ブッダの前世の善行功徳を説いており、パーリ語で五四七話も伝えられている。これらを前生話とか前生譚と呼ぶ。前生譚は、ブッダの偉大さが今生のみで成就したのではなく、前世からの積み重ねによるものと説く。例えば、飢えた老人に施食するために自分の身体を火中に投じた兎の話などは、日本でも『今昔物語』などを通じて広く人口に膾炙した。こうした仏教の知識が共有された時代であれば、『太子伝』が太子の前世や来世を語り、

転生を述べることは特異なことではなかった。『太子伝』の庶民的体裁とともに、その思想も当時の日本の読者に違和感なく受け入れられたであろう。

今号以下では、観音菩薩を本地として代々転生していく聖徳太子像を『太子伝』の記述に従って追ってみることにする。聖徳太子が南岳慧思の生まれ変りとする信仰は、太子薨去後わずか百年ほどで書かれた『七代記』（奈良時代末期）などにすでに見られ、その思想は平安期の天台宗によって強調されていく。しかし、ここに見る江戸期の『太子伝』では前世における慧思を挙げることなく、三世に亙る転生者を太子の口を通じて述べさせる。先ず、『太子伝』の開巻第一の文では、本書の大前提である太子と観音菩薩の関係が以下のごとく表明される。前出の杉本氏校訂本から引用してみよう。頁数は同書により、一部を除き原文のルビを付した。

『聖徳太子伝』巻一「太子五歳之御時」の挿し絵（杉本氏校訂本、四〇頁より）

「それ、聖徳太子は、三世の諸仏の慈悲をあらはし、救世観音のすいじやく也。すなはち、仏体にして人体なり。人体にして又、十善の儲君なり」（一七頁）

この冒頭の文は、『太子伝』全体に通底する最も重要な太子の宗教的根拠を示している。「三世の諸仏」とは、過去・現在・未来に現れるあらゆる仏のことで、聖徳太子はそうした諸仏諸菩薩の慈悲を顕現した人であるとする。平仮名で「すいじやく」とあるのは「垂迹」のことで、仏が衆生済度のために仮の姿を取ってこの世に現れることを意味する。神仏習合の思想では、本地すなわち本体である仏教の仏菩薩が日本の神道の神々として垂迹すると説明されてきた。『太子伝』においては、この世に現れた聖徳太子の本地は救世観音と明言している。その身体は仏であると同時に人体であり、十善をなす儲君すなわち皇子であるという。十善は不殺生・不偸盗・不邪淫など、仏教における十の善き行いを指す。

冒頭に太子が観音菩薩の垂迹であると記したことは、『太子伝』の中心的思想である。それに基づき、過・現・未の三世に亙る人物を太子の転生者として挙げ、観音菩薩の慈悲が途切れず脈々と流れていることを示す。それが『太子伝』の主題といってよい。この冒頭の一節が唐突な表現でないことは、同様の記述が本書の随所に見えることからも知られる。ことに最終巻の第十巻の四十五歳の条にある以下の一節は、観音菩薩と太子の本地と垂迹の関係を明確に示すものである。〔〕は原文の脇に付された割り書きの注記である。

「日本は、観音有縁の国にて、一切の神明その本地、みな、観音にてましませり。我朝の仏法の大棟梁とあらはれ給ふ。加賀国白山権現は、十一面観音なり。熊野十二所権現その随一には、西御前は千手、若王子は十一面、児の宮は如意輪、子守りの宮は聖観音。吉野の三十八所の随一も、観音にてまします。紀伊国天野四所の明神の中にも、三の宮は千手観音なり。出羽国羽黒の権現は、聖観音にてまします。摂津国住吉四所の大明神も、一の宮は御本地薬師（大御前大神宮）、二の宮は阿弥陀（住吉明神）、三の宮は大日如来（諏訪明神）、四の宮は聖観音・神功皇后。関東守護の二所権現の随一、走湯権現は千手観音。日吉七社の随一に、八王子千手にてまします。稲荷・北野・賀茂・春日、惣じて日本国中の高山の峰、沈谷の中、所々の霊験、おほくは、是、観音大聖の垂迹なり。しかれば、聖徳太子、一切神明、みなそれ、本地観音にてましますもの也、云々」（三九五頁）

紙幅が尽きたので、この解説は次号に譲ろう。

■健康登山者投稿作品■

季節の絵手紙「蕃茄（トマト）」

八王子市 栃谷玲子 様

高尾山 季節散歩

暦の言葉
「七十二候」
乃東草
「なつかれくさかるる」
六月二十一日～六月二十五頃

「乃東」とは夏枯草（ウツボグサ）を意味します。かつてウツボグサは、冬至に生えて、夏至に枯れると考えられておりました。

実際には、六月頃に花が咲き、花が散ると、様々な夏草が茂る中で、一見枯れたようになる見た目から、この名前が付いたようです。

今月の風物詩
枝豆

枝豆は大豆が未成熟のまま、収穫されたもので、塩茹でにしたり、お茶、ずんだ餅などに加工されたりして食されております。

特に、アルコールの分解を促進させる成分が含まれており、ビールのお供として人気です。

近年では海外でも枝豆の食用が広まっております。

一歩一歩煩悩滅除

百八の階段を昇り、悩みや煩い事を取り除きましょう

百一段　機会を見捨てないように

機会、チャンスと言った方が分かりやすいかもしれません。人々は様々な機会に出会います。しかし、その機会を生かせない、そもそも機会であると気が付かない時もあります。自己研鑽して機会を見逃さないようにしましょう。

高尾山の昆虫 140

ミズイロオナガシジミ

ミズイロオナガシジミ（水色尾長小灰蝶）という可憐なシジミチョウがいて、コナラやクヌギが多い場所で生息しています。

ギリシャの神話に因んだ、ゼフィルスと呼ばれるミドリシジミの仲間で、樹上性の蝶であることが知られています。

本種は日中にはあまりその姿を見かけることがなく、これは樹上の葉陰で休息しているためで、夕方になると一転して活発に活動します。

ミズイロオナガシジミという、とても愛らしい和名ながら、翅の表側はややくすんだ灰色という渋い色彩で、翅の縁のみ水色、そして後翅の下方に数個の水玉風模様が現れます。

また翅を閉じると、ほんのり薄い水色を帯びた白地に明瞭な黒い帯が入り、末端に二か所オレンジ色の可愛い紋が確認できます。

そして後翅の突端には長い尾状突起を備え、ミズイロオナガシジミという、ネーミングの要件は満たしているように思われます。

金属光沢が強いミドリシジミのような派手さこそはありませんが、清楚な天使のような本種に六月の高尾で、確実に出会うことができます。

（文 松島 孝　撮影 上村 雅昭）

高尾山 修行場めぐり 3

佛舎利奉安塔

有喜苑の「佛舎利奉安塔」には、大聖釈迦牟尼世尊（お釈迦様）の真身骨が奉安されております。

真身骨とはお釈迦様の舎利（御身骨）です。この御真骨は明治三十一年に英国人ウイリアム・ペッペ氏により発掘され、仏教国であるタイ王国（当時はシャム）に寄贈された御真骨に由来します。

その後、御真骨はミャンマー（当時はビルマ）、スリランカ（当時はセイロン）にも寄贈されました。日本へは明治三十三年に贈られ、現在は名古屋市の覚王山・日泰寺にお祀りされております。

高尾山で祀られる御真骨の由来も同様で、昭和五年から六年にかけて少年団日本連盟（現在のボーイスカウト）がタイ王国を訪問したことに対し、タイ王室より日本の青少年が釈尊の精神により、正しく指導されることを念願して贈られました。

高尾山に祀られるようになった経緯は、東京都内でありながらも、多くの自然が残る清浄な地であったため選ばれたというもので、昭和三十一年に現在の奉安塔に納められました。

厄年を過ぎた御信徒の皆様へ

六十才の厄年を過ぎたなら
一年・一年を
七十才を過ぎたなら
暑さ、寒さを
八十才を過ぎたなら
春夏秋冬を
九十才を過ぎたなら
一日・一日を
気を付けられ
日々を大切に
圓満にお暮し下さい

当山では皆様の（身体健全（寿命長久））を祈念して

福壽圓満の御護摩をお申し受け致しております。

◎健康登山の皆様へ

高尾山報投稿の御案内

御護摩受付所では、皆さまの『健康』に関する思いや思い出・習慣、又は『健康登山』を通じて経験した出来事などの、心温まるお話を聞かせて、頂いています。

そこで、皆様のお話を多くの方々にお届けできますように、御護摩受付所に「投稿箱」を設置致しまして、皆様から投稿頂いたお話や作品を、『高尾山報』に掲載させて頂いております。

その他、おもしろい体験・変わった出来事・ポエム・俳句等どんなお話でも結構です。是非お聞かせください。御協力宜しくお願い致します。

※　**投稿頂きました作品は全て掲載できるよう努めますが、当山の判断で掲載しない場合もあります。また、多くの方に投稿頂きました場合、掲載までお時間を頂く場合がございますことを御了承下さい。**

『高尾山健康登山の証』のお勧め

年間約二百八十万人の人々が訪れ、「世界一登山者の多い山」として知られている高尾山。

登山者の皆様の励みになれば、との思いから平成十一年から健康登山を始め、いまでは約五万人の方々が会員となられております。

期限はございませんので、御自分のペースでお楽しみください。

また、一冊に付き二十一回スタンプを押すページがあり、終了したことを満行と言います。満行されますとお祝い膳として、精進料理の御接待や、健康登山者限定の記念品などと交換もできます。

帳面……七百円
スタンプ…百円

御護摩修行のおすすめ

皆様の諸願成就を祈願する

高尾山では大本堂に於いて、毎日御護摩修行を行っております。

御護摩修行とは、護摩木という特別な薪を大導師が御護摩の炎の中に投入し、あらゆる煩悩を焼き浄めるために行われます。そして、御信徒の皆様の祈りが御本尊に届けられ、皆様の諸願が成就するという修行であります。

御護摩修行を行った方には、御護摩札が授与されます。

大切にお持ち帰り頂き、お供物と共に自宅等に奉安礼拝して、一心に御宝号「南無飯縄大権現」とお唱え下さい。

郵送御護摩申し込み受付について

高尾山では大本堂に於いて、毎日御護摩修行を行っております。遠方にお住まいの方や、感染症流行によりお参りできない御信徒皆さまのために、御護摩札の郵送もお受けしております。

手紙、FAX等での申し込みをお願いしておりますが、高尾山薬王院の公式ホームページ内にあります「御護摩祈祷の御案内」からも、直接お申し込みすることが出来ますので、こちらも併せて御案内申し上げます。

ご不明な点等ございましたらお問い合わせ願います。

お問い合わせ先
TEL〇四二一・六六一・一一一五
Fax〇四二一・六六四・一一九九
「郵送御護摩係」まで

高尾山のお護摩札とお供物

（大）10,000円 （中）5,000円 （小）3,000円	お護摩 3,000円以上	お護摩 5,000円以上	お護摩 10,000円以上	特別大護摩 30,000円以上	開帳大護摩 50,000円以上	特別開帳大護摩 100,000円以上

家内安全（家）
商業繁栄（商）
事業繁栄（事）
交通安全（車・交）
交通安全（神棚用木札・木・交）
身上安全（身）
災難消除（災）
厄除（厄）
身体健全（体）
当病平愈（病）
開運（開）
良縁成就（縁）
安産成就（安）
入学成就（入）
心願成就（心）
御礼（礼）
奉納杉苗（杉）

お護摩の願事

お願い事は一修一願意とします。

併願（二願意）は一万円より受け賜ります。

但し、五千円で家内安全と商売繁昌のみ併願とさせて頂きます。

お護摩札には年令・生年月日等は入りません。

一一内の略称をお書き下さい。

「第三十九回 高尾山写経大会」

開催のお知らせ

本年の写経大会は新型コロナウイルス感染予防のため、参加人数を例年より制限して開催致します。例年同時に実施されておりました夏期講座につきましては、中止となります。

また、昨年実施致しました在宅写経は、コロナ禍につき本年も同様に実施させて頂くこととなりました。在宅にて写経大会参加をご希望の方につきましては、写経作法・心得を記した「写経の手引き」等、写経用紙一式を送付致しますので、ご自宅にて書写後、同封の返信用封筒にて**七月二十一日(水)必着**でお送り下さい。

ご返送頂きました写経は写経大会のおりに、ご本尊様御宝前に奉安させて頂きますので、予めご了承ください。

高尾山での写経をご希望の方

日　時　七月二十五日（日）　午前九時半集合
会　場　高尾山薬王院大本坊
会　費　二千円（昼食無し）
申　込　お電話にてお申込み下さい。
TEL〇四二一・六六一・一一一五
※定員（五十名）になり次第締め切ります
写経に必要な諸道具は当山にて御用意致します。

在宅での参加をご希望の方

会　費　二千円
※参加費につきましては、送付物一式に同封の払込取扱票を利用して、郵便局にてお支払い願います。
申　込　お電話、もしくはハガキに郵便番号、住所、氏名、電話番号を明記の上、左記までお申込み下さい。
TEL〇四二一・六六一・一一一五
〒一九二-八六八六
八王子市高尾町二二七七　高尾山写経大会係
申込締切　七月七日（水）必着

院内散歩 52

～薬王院の展示物～

和紙絵画『山道』　作：中島孝子

人事異動（五月二十一日付）

信徒部長　深田　洋平
庶務部長　藤田　健太郎
参　事　堀江　承豊

登山だより

七月行事日程

一日～七日
聖天秘供(聖天堂)

八日、二十日
弁天様御縁日

八日
仏舎利詣り(仏舎利塔)

十二日
お施餓鬼大法要

二十一日
飯縄様御縁日
神徳報謝百味飲食供
(九時大本堂)

二十五日
高尾山とんとんむかし
「語り部の会」
(十二時半山麓不動院)

二十六日
御詠歌勉強会
(十時山麓不動院)

二十八日
奥之院開扉供養
(十時奥之院)

※お施餓鬼につきましては、昨年同様に感染症予防の為、檀信徒の皆様には参列をご遠慮頂きまして、当山の僧侶のみにて厳修させて頂きます。
お申し込み方法などの詳細につきましては、後日御連絡させて頂きます。

毎日のお護摩奉修時間
(4月15日～10月31日まで)

午前5時30分
〃　9時30分
〃　11時00分

午後0時30分
〃　2時00分
〃　3時30分

ご講中・団体等御相談下さい。

神徳報謝百味飲食供 御志納のおすすめ

当山では、御本尊飯縄大権現様の日々の御加護に感謝するために、御縁日である二十一日に、沢山のお供物を捧げて、大般若経六百巻を転読し、供養申し上げる法要を執り行っております。
皆様の御志納を受け付けておりますので、ご希望の方は問い合わせ下さい。
尚、法要終了後に大本堂にて百味の御札を授与致します。
また、当日参加できない方にはお札の郵送も受け付けております。

毎月二十一日　午前九時(於大本堂)
御志納金　一口　三千円以上

大般若経を守護する十六善神の図

高尾山報助成金志納者
御芳名(順不同・敬称略)

潟上市　照明寺
東村山市　福島光子
宮崎市　田崎恵子
羽村市　島津彰仁
高崎市　岸惠三郎
〃　小暮典子
坂戸市　村田千明
八王子市　福島元行
〃　天野章雄
相模原市　比留間榮子
足立区　中山恵司
銚子市　伊藤雅一
八王子市　増山進
熊谷市　丸山進
小平市　関道雄
東筑摩郡　竹内政男
台東区　石井睦子
伊勢原市　佐々木晋介
八王子市　石井忠明
新座市　彰山粧麗
高尾山健康登山者一同

発行所
東京都八王子市高尾町2177
大本山
高尾山薬王院
郵便番号　193-8686
電話(042)-661-1115(代)
FAX(042)-664-1199
発行人　菅谷秀文
編集人　菅井倫浩
印刷　ヒラツカ印刷社
毎月1回1日発行
1部50円

高尾山薬王院ホームページ
http://www.takaosan.or.jp